全国社会科教育学会
『社会科研究』第38号 1990 (pp. 16－27)

# 中等社会科教育課程成立史研究（Ⅳ）

## －『学習指導要領社会科編Ⅱ(試案)』の主要参考文献と単元構成原理 －

木 村 博 一

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．『要領Ⅱ』の作成過程
　1．ＣＩＥ文書よりみた『要領Ⅱ』の作成過程
　2．勝田守一資料よりみた『要領Ⅱ』の原案
　3．『要領Ⅱ』の作成過程についての小括
Ⅲ．『要領Ⅱ』とヴァージニア・プランの相関関係
　1．各学年のテーマの相関関係（以上，第一稿）[1]
　2．各単元の主題の相関関係　（以上，第二稿）[2]
　3．各単元の記載内容の相関関係
　4．『要領Ⅱ』とヴァージニア・プランの相関関係についての小括
Ⅳ．『要領Ⅱ』と『中等学校・青年学校　公民教師用書(続)―(第三章版)』の相関関係　（以上，第三稿）[3]
Ⅴ．『要領Ⅱ』とミズーリ・プランの相関関係
Ⅵ．『要領Ⅱ』の編集方針
Ⅶ．おわりに　―『要領Ⅱ』の単元構成原理―　（以上，本稿）

本研究では，『学習指導要領社会科編Ⅱ（試案)』(本研究では，『要領Ⅱ』と略記している）が，どのような主要参考文献に依拠しつつ，どのような編集方針にそって，どのような経緯で作成されたのかという課題を一貫して追求している。このような課題を設定したのは，ミズーリ・プランを詳細に検討したところ，歴史・地理的内容を中心とする分化的カリキュラム構成であり[4]，『要領Ⅱ』の総合社会科的なカリキュラム構成とは全く異なっていることから，『要領Ⅱ』がミズーリ・プランをもとに作成されたという通説[5]に疑問を抱いたからである。そして，1941年版中等学校用ヴァージニア・プランを詳細に検討したところ，『要領Ⅱ』と共通点の多いカリキュラム構成であり，『要領Ⅱ』はそれに依拠しつつ作成されたのではないかという仮説を立てたからである。

Ⅱ．では，ＣＩＥ文書の Conference Report と Weekly Report 及び『勝田守一資料』を手がかりとして，『要領Ⅱ』の各学年のテーマ及び各単元が，勝田守一や馬場四郎をはじめとする文部省の社会科委員会委員と，ＣＩＥ教育課の中等社会科担当係官であったオズ

ボーン（Monta. L. Osborne）とボールス（Luanna. J. Bowles）とのやりとりの中で，どのように作成されていったのかを明らかにした。

Ⅲ．では，「『要領Ⅱ』の各学年のテーマ及び各単元の主題は，1941年版中等学校用ヴァージニア・プラン（State Board of Education, Virginia; Materials of Instruction Suggested for the Fourth Year of the Core Curriculum of Virginia Secondary Schools, 1941）と1943年版初等学校用ヴァージニア・プラン（第７学年のみ）（State Board of Education, Virginia; Course of Study for Virginia Elementary Schools Grades I-VII, 1943）に記載された各学年のテーマ及び各単元の主題を主な典拠として作成された」という仮説を設定し，考察を進めた。その結果，Ⅲの１では，『要領Ⅱ』の第７～10学年の４つのテーマの中の３つに，ヴァージニア・プランの各学年のテーマからの明確な影響を見い出すことができた。一例をあげると，『要領Ⅱ』の第10学年のテーマは「民主主義における人間関係」であり，このテーマの英訳はＣＩＥ文書によると“Effects of Democracy upon Human Relationships”であるが，この英訳テーマはヴァージニア・プランの第10・11学年のテーマと一致している。

Ⅲの２では，各単元の主題について，『要領Ⅱ』の合計24の単元（第９学年の単元Ⅱは(イ)(ロ)に分かれているので，正確には25単元）の中で，15単元，わずかな影響までを含めると18単元に，1941年版中等学校用及び1943年版初等学校用ヴァージニア・プランからの影響があることを明らかにした。一例をあげると，『要領Ⅱ』の第９学年の単元Ⅵ「個人は共同生活によく適合して行くには，どうしたらよいであろうか」の英訳は“How can the individual best discharge his responsibility for community life？”であり，1943年版初等学校用ヴァージニア・プランの第７学年の単元Ⅰ“How can the individual best discharge his social responsibility？”とほぼ一致している。そして，単元の主題に関してヴァージニア・プランからの影響がみられない単元は７個であるが，それらの単元の特徴として，歴史・地理的内容の単元が３個，民主主義の精神（日本国憲法の精神）を教えることをねらいとした単元が２個含まれていることも指摘した。

Ⅲの３では，『要領Ⅱ』の第10学年の単元Ⅲ「従業員と雇よう主とは相互にどのような権利と義務を持っているか。また両者は社会に対してどのような義務を持っているか」及び単元Ⅳ「貧困や生活難から，社会や個人を助けるため，どんな手段がなされているか」については，単元の「目標」「教材の排列」「学習効果の判定」の記述が，1941年版中等学校用ヴァージニア・プランの単元“Employer－Employee Relationships”及び“Poverty and Insecurity”の記述と一致している部分が多いことを明らかにした（「目標」は単元Ⅲのみ一致している）。

Ⅳ．では，『要領Ⅱ』の単元の「学習活動の例」に，『中等学校・青年学校　公民教師用書（続）－（第三章）』（本研究では，『第三章版』と略記している）に記載された「生徒の活動（問題解決）の実例」が繰り込まれていることについて考察した。その結果，『要領Ⅱ』の合わせて13の単元の「学習活動の例」に，延べ300個の「生徒の活動（問題解決）

の実例」が繰り込まれていることが明らかになった。

## V.『要領Ⅱ』とミズーリ・プランの相関関係

これまでの考察により，『要領Ⅱ』のカリキュラムと単元の内容へのミズーリ・プランからの影響は皆無に近いことが明らかになった。では，なぜ『要領Ⅱ』はミズーリ・プランにもとづいて作成されたという通説が生まれたのだろうか。いいかえれば，『要領Ⅱ』の作成責任者であった勝田守一は，「中等の方もヴァージニア系だといわれているのですけれども，じつはヴァージニア系じゃないのです。オズボンがミズリー出身でミズリーのコース・オブ・スタディを持ってきたわけです」[6]と述べて，なぜヴァージニア・プランにもとづいたのではなく，ミズーリ・プランにもとづいたと受け取れる証言をしたのだろうか。(その証言の後に「ヴァージニアも見せてもらった」と述べてはいるが)。

そこで，『要領Ⅱ』とミズーリ・プランをもう一度比較対照した結果，次のような仮説が導かれた。

仮説3．『要領Ⅱ』の単元展開の構成は，1941年版中等学校用ミズーリ・プランを参考にして設定された。

この点に関して，『要領Ⅱ』の作成委員であった馬場四郎の次のような回顧が注目される。「わが国の社会科学習指導要領Ⅱの各単元展開方法は，(1)要旨，(2)目標，(3)教材の排列，(4)学習活動の例，(5)学習効果の判定，の五部分からなっている。これを前記の合衆国のもの（「ボルチモア，レークウード，ソールトレークシティ，インデアナポリス，フォートウォースの社会科コース・オブ・スタディの展開」のこと……筆者）と比較すると，学習効果の判定はわが国のものにあるが，前記の合衆国の例にはない。しかしミズーリ州の社会科コース・オブ・スタディ等には各単元毎にそれが入れてあるから，わが国独特のものではない。他のものにあってわが国のものにないのは参考文献のリストである」[7]

詳細に検討してみよう。『勝田守一資料』には，『要領Ⅱ』の第7学年単元Ⅰ「日本列島はわれわれにどんな生活の舞台を与えているか」の原案の英訳文が含まれている[8]。その単元展開の構成の英訳と，1941年版中等学校用ミズーリ・プランの単元展開の構成を比較対照すると次のようである。

| ○『要領Ⅱ』の単元展開の構成 | ○ミズーリ・プランの単元展開の構成[9] |
|---|---|
| (1) 要旨（Overview） | (1) Overview (Introduction to the Unit) |
| (2) 目標（Objectives） | (2) Objectives |
| | (3) Teaching Suggestions |
| (3) 教材の排列 (Scope and Sequence of the Unit) | (4) Scope and Sequence of the Unit |
| | (5) Reading for Pupils |

(4) 学習活動の例 (6) Suggested Pupil Activities
(Suggested Pupil Activities)
(5) 学習効果の判定 (Evaluation) (7) Evaluation

このように英文で照合すると，『要領Ⅱ』の単元展開の構成と，1941年版中等学校用ミズーリ・プランの単元展開の構成とは，馬場氏が述べていた「参考文献」及び「教授のための示唆」を除けば，完全に一致していることがわかる。

ちなみに，1941年版中等学校用ヴァージニア・プランの単元展開の構成は以下の通りであり，「要旨」「目標」「教材の排列」「学習活動の例」「学習効果の判定」に相当する語句がみられるが，『要領Ⅱ』の単元展開の構成の英訳とは，表現が全く異なっている。

○1941年版中等学校用ヴァージニア・プランの単元展開の構成[10]

(1) Significance to Society ……「要旨」に相当
(2) Significance to Pupil ……「要旨」に相当
(3) Suggested Aims ……「目標」に相当
(4) Suggestion for Evaluation ……「学習効果の判定」に相当
(5) Consideration Involved in the Problem ……「教材の排列」に相当
(6) Suggested Pupil Experiences ……「学習活動の例」に相当
(7) General References

ここで，『要領Ⅱ』の場合と同様に，『学習指導要領社会科編Ⅰ（試案）』（以下，『要領Ⅰ』と略記する）と，それが依拠した1943年版初等学校用ヴァージニア・プランの単元展開の構成を列記すると，次のようである。

| ○『要領Ⅰ』の単元展開の構成 | ○1943年版初等学校用ヴァージニア・プランの単元展開の構成[11] |
|---|---|
| (1) 指導の着眼 | (1) Things that may be interesting to children |
| (2) 指導結果の判定 | (2) Suggestive activities |
| (3) 学習活動の例 | (3) Evaluation |

一見してわかるように，『要領Ⅰ』の単元展開の構成は，1943年版初等学校用ヴァージニア・プランの「学習活動の例」と「指導結果の判定」の順序を変えただけであり，後者から前者への影響は明瞭であるということができる。

ここで注目すべきことは，『要領Ⅱ』の単元展開の項目としてあげられていた「目標」と「教材の排列」が，『要領Ⅰ』には含まれていないということである。単元の学習を構成する要素は目標・内容・方法であるが，『要領Ⅰ』には目標と内容に関する欄がないのである。評価は目標と表裏一体の関係にあるから，目標が記述されていなくても，評価の基準をみれば，目標をある程度まで類推することはできる。したがって，『要領Ⅰ』に「目標」の欄がなくとも，目標を読み取ることは可能である。そのように考えると，『要領Ⅱ』と『要領Ⅰ』の相違を最も明確に決定づけているのは，内容の記述としての「教材

の排列」の有無である。『要領Ⅰ』は小学校用の学習指導要領であるから，活動（方法）を重視し，『要領Ⅱ』は中等学校（中学校第１学年～高等学校第１学年）用の学習指導要領であるから，教材（内容）を重視した構成となっているのである。

初期の社会科の理論的指導者であった上田薫・重松鷹泰・梅根悟らの諸氏が学習の方法の側面を重視したのに対し，勝田守一は社会科の教科内容を重視した理論家であったことはよく知られている[12]。したがって，勝田は，『要領Ⅱ』の最大の特徴は，『要領Ⅰ』とそれが依拠した1943年版初等学校用ヴァージニア・プランとには含まれていない「教材の排列」が記述されていることだと考え，「教材の排列」を含んだ単元展開の構成は1941年版中等学校用ミズーリ・プランに依拠したのであるから，『要領Ⅱ』はミズーリ・プランにもとづいて作成したと述べたものと考えられる。

『要領Ⅰ』と，それが依拠した1943年版初等学校用ヴァージニア・プランの学習活動重視（いいかえれば，教科内容軽視）の特色は，当時広く知られていた。戦後の新教科としての社会科の特色は，特定の内容を教えることではなく，何らかの活動を通して子どもに主体的に考えさせることであるととらえられていた。そのため勝田は，中等社会科は初等社会科とは異なる原理で構成したことを強調するために，『要領Ⅱ』は中等学校用のヴァージニア・プランに主に依拠したとはあえて語らず，『要領Ⅱ』の特色はミズーリ・プランにならって「教材の排列」の欄を設けたことにあると強調したものと考えられるのである。

## Ⅵ.『要領Ⅱ』の編集方針

本研究においては，これまで，『要領Ⅱ』と，1941年版中等学校用及び1943年版初等学校用ヴァージニア・プラン，1941年版中等学校用ミズーリ・プラン，『第三章版』とを比較対照する中で考察を進め，『要領Ⅱ』はカリキュラム構成を主に1941年版中等学校用及び1943年版初等学校用ヴァージニア・プランに依拠し，「学習活動の例」の一部を『第三章版』から繰り込み，各単元の展開の構成を1941年版中等学校用ミズーリ・プランに依拠していたことを明らかにしてきた。しかし，『要領Ⅱ』のカリキュラムへのヴァージニア・プランの影響，及び『要領Ⅱ』の単元展開の構成へのミズーリ・プランからの影響については，「対比してみると共通点が多い」というレベルでの状況証拠を提示したに過ぎないということができる。というのも，『要領Ⅱ』の「学習活動の例」に『第三章版』の「生徒の活動（問題解決）の実例」を繰り込んだという上田薫の証言があるものの，ヴァージニア・プラン及びミズーリ・プランから『要領Ⅱ』への影響については，「ミズリーほか数州の『コース・オブ・スタディ』を参考にし」[13]「ヴァージニアもみせてもらった」という，どの部分を参考にしたのかが不明の勝田守一の証言があるだけだからである。ＣＩＥ教育課の社会科担当係官と文部省の社会科委員会は，『要領Ⅱ』のカリキュラムを主にヴァージニア・プランに，単元の展開をミズーリ・プランに依拠して構成することを本当に意図していたのかという問題が残っているのである。

### 1．カリキュラム構成の方針

カリキュラム構成についての『要領Ⅱ』へのヴァージニア・プランからの影響について考察してみよう。これについては，ＣＩＥ教育課の主任を務めたトレイナー（J.C. Trainor）がアメリカに持ち帰った占領当時の資料である Trainor Collection の中から，次のような社会科学習指導要領の作成に関する注目すべき記述を見つけることができた。

「これ（社会科学習指導要領の作成のこと…筆者）は壮大なプロジェクトであり，その目的は，ヴァージニア州のコース・オブ・スタディ（試案）にある程度類似した学習指導要領を作成すること，そして学習指導要領を初等・中等段階の学校の教育計画を構成する基軸として機能させることである」[14]

この文章で注目されることは，小学校だけでなく，中等学校（第７～10学年）においても，ヴァージニア・プランに類似した社会科学習指導要領を作成することがめざされていたということである。小学校用の『要領Ⅰ』が1943年版初等学校用ヴァージニア・プランのカリキュラムに依拠しつつ作成されていることは周知の事実であるが，『要領Ⅱ』も同様にヴァージニア・プランのカリキュラムに依拠しつつ，「ある程度類似した」カリキュラムを構成することがめざされていたのである。

それと関連して，ＣＩＥ文書には次のような記述がみられる。

「目下，第７・８・９・10学年の４つの学年の総合社会科コース用の問題が選定されつつある。表面的には，問題単元に翻訳した主題を用いているために（from the translated titles of the problem units），各学年の問題間の連続性の欠如があらわれてきている。しかし，執筆者は，問題の主題のリストが暗に示している内容に関わらず，望ましい程度に連続性が存在するように心がけている」[15]

この記述では，「問題単元に翻訳した主題を用いている」という一節が注目される。すなわち，『要領Ⅱ』の各単元の主題は，何らかのアメリカのカリキュラムの単元の主題を翻訳したものであることが明言されているのであり，それが，1941年版中等学校用及び1943年版初等学校用（第７学年のみ）ヴァージニア・プランをさしていることは，これまでの考察により明白である。

### 2．単元展開の構成の方針

次に，『要領Ⅱ』の単元展開の構成へのミズーリ・プランからの影響について考察しよう。この点について，ＣＩＥ文書には，次のような興味深い記述がみられる。

「目下，社会科委員会は，この文書の署名者（オズボーンのこと…筆者）が提示し，文部省のグループが採用したアウトラインにそって，単元を完全な形にすることに取り組んでいる。このアウトラインは，学習指導要領の社会科の各単元の構成を次のような

ものにすることを明確に指定している。(1)要旨（Overview），(2)目標（Objectives），(3)教材の排列（Scope or Content of the Unit），(4)学習活動の例（Suggestive Pupil Activities），(5)学習効果の判定（Evaluation），(6)参考文献（References）」[16]

この記述から，『要領Ⅱ』の単元展開の構成は，オズボーンが提示し，文部省の社会科委員会が採用したものであることがわかる。そして，オズボーンによって提示された単元展開の構成は，本稿のⅣでの考察から明らかなように，1941年版中等学校用ミズーリ・プランのそれと酷似している。勝田氏の「オズボンがミズリー出身で，ミズリーのコース・オブ・スタディを持ってきた」という証言は，オズボーンがミズーリ・プランの単元展開の構成にならって『要領Ⅱ』の単元展開を構成するように示唆したと解釈できるのである。

## Ⅶ．おわりに　―『要領Ⅱ』の単元構成原理 ―

馬場四郎は，『要領Ⅱ』の合計25個の単元を，次頁のような単元表にまとめている[17]。この単元表は，「社会活動の機能的分類」をスコープとし，各学年の生徒の「興味の中心」をシークエンスとした構成をとっている点で，1941年版中等学校用ヴァージニア・プランの単元構成の方式と全く同じである。（社会機能の分類のしかた，各学年の興味の中心の順序は異なっている。）馬場氏が，『要領Ⅱ』の各単元をヴァージニア・プランと同じ方式の単元表にまとめていることは，文部省の社会科委員会が，『要領Ⅱ』を1941年版中等学校用ヴァージニア・プランと類似したカリキュラムにすることを志向していたことのあらわれと考えられる[18]。

しかし，これまでの考察により，『要領Ⅱ』の構成原理は，ヴァージニア・プランに類似したカリキュラムを構成することだけではなかったことが明らかになっている。事実，馬場氏自身も，「今回社会科の教育内容を構成するにあたっても，当初ヴァージニヤ・プランの方式を，若干参考にした点はあったが，必ずしもこの図式を全面的に採用することはしなかった。申すまでもなく，わが国の社会生活の現実や，生徒の生活の実態は，合衆国のそれとは著しく異なるからである」[19] と述べている。では，『要領Ⅱ』の構成原理は，どのようなものであったのだろうか。以下に，本研究で明らかになった『要領Ⅱ』の単元構成原理を提示して[20]，本研究に区切りをつけることとしたい。

1．『要領Ⅱ』の各学年のテーマ及び各単元の主題の多くは，「ヴァージニア・プランにある程度類似した学習指導要領を構成する」という方針により，1941年版中等学校用及び1943年版初等学校用（第７学年のみ）ヴァージニア・プランの各学年のテーマ及び各単元の主題に依拠しつつ作成されたことは明白である。『要領Ⅱ』の第８・９・10学年のテーマは，該当学年を異にしているものの，ヴァージニア・プランの各学年のテーマと完全に一致している。（第７学年のテーマ「日本におけるわれわれの生活」は，日本

## 表1　馬場四郎作成の『要領II』の単元表

| 強調すべき生徒の主要経験領域（教材の系列）／社会活動の主要機能（教材の範囲） | 第七学年（中学校第一学年）<br>日本における われわれの生活 | 第八学年（中学校第二学年）<br>人間生活に対する 産業の影響 | 第九学年（中学校第三学年）<br>協同生活に対する 社会的条件 | 第十学年（高等学校第一学年）<br>民主主義における 人間関係 |
|---|---|---|---|---|
| (1)人的資源および天然資源の保全と愛護 | I 日本列島はわれわれにどんな生活の舞台を与えているか。<br>II われわれの家庭生活はどのように営まれているであろうか。 | II 天然資源を最も有効に利用するには，どうすればよいか。<br>V 自然の災害をできるだけ軽減するにはどうすればよいか。<br>VI 社会や政府は生命財産の保全についてどういうことをしているか。 | VI 個人は共同生活によく適合して行くにはどうしたらよいであろうか。 | IV 貧困や生活の困難から社会や個人を助けるために，どんな手段がとられているか。 |
| (2)物資と労務の生産 | IV わが国のいなかの生産生活はどのように営まれているであろうか。<br>V わが国の都市はどのように発達して来たか，また現在の都市生活にはどんな問題があるか。 | I 世界の農牧生産はどのように行われているか。<br>II 近代工業はどのように発展し，社会の状態や活動にどんな影響を与えて来たか。 | | III 従業員と雇よう主とは，相互にどんな権利と義務を持っているか，また両者は社会に対してどんな義務を持っているか。 |
| (3)物資と労務の分配 | | | | |
| (4)物資と労務の消費 | | | V 消費者の物資の選択に際して，社会の力はどういう影響を与えているであろうか。 | |
| (5)物資と労務の運搬 | | | | I 市場，仲買業者，貸し付け取引所，および経済的企業は，われわれの経済生活においてどんな機能を果たしているか。 |
| (6)交通・通信（交際を含む） | | IV 交通機関の発達はわれわれをどのように結びつけて来たか。 | I われわれは過去の文化遺産をどのようにうけついでいるであろうか。 | |
| (7)美的・宗教的欲求の表現 | | | II a．われわれの芸術的欲求を満足させるために，社会はどんな機会を与えているか。<br>b．宗教は社会生活に封してどういう影響を与えてきたか。 | VI われわれは世界の他の国民との正常な関係を再建しこれを維持するためにどのような努力をしたらよいか。 |
| (8)教育の制度と施設 | III 学校は社会生活に対してどんな意味を持っているであろうか。 | | IV 職業の選択に際し，また職業生活の能率を上げるために，どんな努力をしなくてはならないか。 | |
| (9)レクリエーションの制度と施設 | VI われわれは余暇をうまく利用するにはどうしたらよいであろうか。 | | | |
| (10)政治の制度と施設 | | | III われわれの政治はどのように行われているであろうか。 | II われわれの経済生活に対している政府はどんな仕事をしているか。<br>V 日本国民はどのように民主主義を発展させつつあるか。 |

側で考案されたものと考えられる。）また，『要領Ⅱ』の合わせて25個の単元の中で15個の単元，わずかな影響までを含めると18個の単元の主題に，ヴァージニア・プランの単元の主題からの影響がみられる。

2．『要領Ⅱ』の単元の中で，ヴァージニア・プランからの単元主題への影響がみられない単元は7個である。

その中に，歴史的・地理的内容の単元が3個含み込まれている。（第7学年単元Ⅰ「日本列島はわれわれにどんな生活の舞台を与えているか」及び第8学年単元Ⅰ「世界の農牧生産はどのように行われているか」は地理的内容，第9学年単元Ⅰ「われわれは過去の文化遺産をどのように受けついでいるであろうか」は歴史的内容の単元である。）

第9学年単元Ⅲ「われわれの政治はどのように行われているであろうか」及び第10学年単元Ⅴ「日本国民はどのように民主主義を発展させつつあるか」は，戦前とは異なる戦後の民主主義の精神（日本国憲法の精神）を教えるために加えられたと考えられる。

残りの2個は，第7学年単元Ⅲ「学校は社会生活に対してどんな意味を持っているであろうか」と第8学年単元Ⅴ「自然の災害をできるだけ軽減するにはどうしたらよいか」である。地震や火山噴火の多い日本では，「自然災害」に関する単元が不可欠であると判断され，加えられたものと考えられる。

3．『要領Ⅱ』の第10学年単元Ⅲ「従業員と雇よう主とは相互にどのような権利と義務を持っているか。また両者は社会に対してどのような義務をもっているか」及び単元Ⅳ「貧困や生活難から，社会や個人を助けるため，どんな手段がなされているか」の「目標」「教材の排列」「学習効果の判定」の記述は，1941年版中等学校用ヴァージニア・プランの単元 Employer-Employee Relationships 及び Poverty and Insecurity に依拠しつつ構成されたことは明らかである。（後者の単元には「目標」への影響はみられない）。

4．『要領Ⅱ』の13個の単元の「学習活動の例」には，『第三章版』の「生徒の活動（問題解決）の実例」が，延べ300個繰り込まれている。「学習活動の例」の多くを「生徒の活動（問題解決）の例」が占めている公民科的な単元は，第7学年単元Ⅱ「われわれの家庭生活は，どのように営まれているであろうか」，第7学年単元Ⅲ「学校は社会生活に対してどんな意味を持っているであろうか」，第8学年単元Ⅵ「社会や政府は生命財産の保護についてどういうことをしているか」，第9学年単元Ⅲ「われわれの政治はどのように行われているであろうか」，第9学年単元Ⅴ「消費者の物資の選択に際して社会の力はどういう影響を与えているであろうか」，第10学年単元Ⅰ「市場・仲買業者・貸附け・取引所及び経済的企業は，われわれの経済生活においてどんな機能を果たしているか」，第10学年単元Ⅵ「われわれは世界の他国民との正常な関係を再建し，これを維持するためにどのような努力をしたらよいか」の7個である。この中には，単元の主題へのヴァージニア・プランからの影響が明瞭な単元（第8学年単元Ⅵ，第9学年単元Ⅴ，第10学年単元Ⅰなど）と，影響がみられない単元（第7学年単元Ⅲ，第9学年単元Ⅲ）の双方が含まれている。

このことと，『要領Ⅱ』の各単元の「要旨」「教材の排列」「学習活動の例」には，伝統的に日本の学校で教えられてきた内容や日本に固有にみられる内容が含み込まれていることとを考え合わせると，『要領Ⅱ』の中等社会科カリキュラムの構成（各単元の主題の決定）というレベルでは，主に1941年版中等学校用及び1943年版初等学校用ヴァージニア・プランに依拠したものの，「学習活動の例」などの各単元の記載内容の構成については，『第三章版』を用いたり，日本の立場や実情を考慮した学習内容を取り入れるという『要領Ⅱ』の単元構成の方針を読み取ることができる。

5．『要領Ⅱ』の作成責任者であった勝田守一が，『要領Ⅱ』はミズーリ・プランにもとづいて作成されたと述べたのは，ミズーリ・プランにならって単元の展開を構成し，特に「教材の排列」という学習内容を示した部分を『要領Ⅱ』の単元展開の構成に取り入れたのに対し，『要領Ⅰ』と1943年版初等学校用ヴァージニア・プランにはその部分がないことを強調したかったためと考えられる。

以上のことを本研究では明らかにしたが，『要領Ⅱ』のすべての単元が依拠した文献を明らかにしたわけではない。このことについては，今後の研究課題としたい。

## 註

1）拙稿「中等社会科教育課程成立史研究（Ⅰ）―『学習指導要領社会科編Ⅱ（試案）』の作成過程を中心に―」（『愛知教育大学教科教育センター研究報告』第12号，1988）

2）拙稿「中等社会科教育課程成立史研究（Ⅱ）―『学習指導要領社会科編Ⅱ（試案）』の各単元の主題と1941年版中等用及び1943年版初等用（第７学年）ヴァージニア・プランの各単元の主題との相関関係―」（『愛知教育大学研究報告（教育科学）』第38輯，1989）。

3）拙稿「中等社会科教育課程成立史研究（Ⅲ）―『学習指導要領社会科編Ⅱ（試案）』の各単元の記載内容の検討―」（『愛知教育大学研究報告（教育科学）』第39輯，1990）

4）拙稿「ミズーリ・プランの単元構成―初等社会科を中心に―」（広島大学大学院『教育学研究科博士課程論文集』第11巻，1985，及び，「ミズーリ・プランの単元構成（Ⅱ）―中等社会科を中心に―」（広島大学教科教育学会『会報』第21号，1986，を参照されたい。

5）小林信郎「初期社会科に影響したアメリカ社会科の特色」（小林信郎・溝上泰・谷川彰英編『社会科の新展開１人間と環境の授業』明治図書，1977，Ｐ.9）など。

6）勝田守一・岡津守彦「学習指導要領の改訂問題(1)」（梅根悟・岡津守彦編『社会科教育のあゆみ』小学館，1959，Ｐ.20）

7）馬場四郎『社会科の本質』同学社，1947，pp.172～173。

8）『勝田守一資料』（東京大学教育学部教育史・教育哲学研究室所蔵）の単元「日本列島はわれわれにどんな生活の舞台を与えているか」の英文草稿。

9) Missouri State Department of Education, *Secondary School Series, SOCIAL STUDIES*, Bulletin 4A, 1941.

10) State Board of Education, Virginia; *Materials of Instruction Suggested for the Fourth Year of the Core Curriculum of Virginia Secondary Schools*, 1941.

11) State Board of Education, Virginia; *Course of Study for Virginia Elementary Schools Grades I—VII*, 1943.

12) 勝田守一は，1952年（昭和27年）1月の教育科学研究会編集の雑誌『教育』において，歴史・地理的内容を中心とする中等社会科カリキュラムを提案していることは，その一例である。

13) 勝田守一「戦後における社会科の出発」（『岩波講座現代教育学12・社会科学と教育Ⅰ』岩波書店，1961，p.58）

14) Trainor Collection, Box No. 20, Textbook and Curriculum, p. 4, 1946, 6, 6. 本研究では，明星大学戦後教育史研究センター所蔵の Trainor Collection を使用した。その原文は，以下の通りである。

7. The Course of Study

This is a very large project and the aim is to produce a course of study somewhat similar to the State of Virginia Course of Study (Tentative) and to have that Course of Study serve as the meat of school program at elementary and secondary levels.

尚，トレイナーとトレイナー・コレクションについては，片上宗二「K.M. Harkness と J.C. Trainor について—わが国における社会科成立史資料—」（日本社会科教育研究会『社会科研究』第29号，1981）が詳しい。

15) GHQ/CIE, RG. 331, Box No. 5363, Conference Report, 1946, 11, 1.

16) GHQ/CIE, RG. 331, Box No. 5363, Conference Report, 1946, 10, 28.

17) 前掲書7)，pp. 168～169。

18) 勝田守一も，社会活動の諸機能の理解を『要領Ⅱ』の目標としてとらえていたことは，彼が「中学校社会科の目標」として「生産，流通，消費，交通通信，政治，保全，文化，厚生等の根本的な社会的機能の性質や相互の関係を理解させること」（勝田「社会科教育の理論と実際（第三稿）」東京大学学生文化指導会『社会科講座Ⅲ』東京大学学生文化指導会社会科講座部，1948，p.6）からも明らかである。

19) 前掲書7)，p.163。

20) 『要領Ⅱ』の単元構成原理については，谷本美彦「社会科成立期『一般社会科』の構造」（木下百合子・舩尾日出志編『社会科教育論』東信堂，1988）が，筆者の研究途上で発表された。谷本氏も，『要領Ⅱ』はヴァージニア・プラン，ミズーリ・プラン，『第三章版』，民主主義的内容，歴史・地理的内容から構成されたと結論されている。しかし，氏の考察は，ヴァージニア・プランとの関連については，「スコープが同じ

社会機能法であるから」が根拠であるのにとどまり，各学年のテーマへの影響については全く触れられていない。また，『第三章版』からの影響の場合を除いて，ヴァージニア・プラン及びミズーリ・プランからの影響については，各学年のテーマや各学年の主題，さらには単元展開の構成に用いられている語句についての綿密な比較検討が行われておらず，原理レベルの考察にとどまっているということができる。

（付記）

本研究にあたっては，貴重な資料を拝借させていただいた茨城大学の片上宗二氏，『勝田守一資料』拝借のお世話をいただいた学習院大学の斉藤利彦氏の他，谷本美彦氏，資料を閲覧させていただいた明星大学戦後教育史研究センター，国立国会図書館憲政資料室の皆様の助力をいただいた。末尾ながら，心よりお礼申し上げます。

尚，本稿は，昭和63年度文部省科学研究費補助金〔奨励研究（A）〕にもとづく成果の一部である。